

蒼き炎が照らすもの

96犬くん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人が次第に朽ちゆくように、国もいずれは滅びゆく。

千年栄えた帝都すら、今や腐敗し生き地獄…

人の形の魑魅魍魎が、我が者顔で跋扈する。

そんな帝国の辺境に幸か不幸か、また一つの命が産み落とされる。

その少年の灯火はただの種火で終えるのか…それとも帝国を焼く業火となり得るか。

これはそんな少年の物語…

目次

プロローグ	1
一話 首斬りザンク	11
二話 ナイトレイドとの遭遇	23
三話 イエーガーズ	37
四話 初仕事	52
五話 決戦前	64
六話 スタイリッシュな進行	75
七話 帝具人間	90

プロローグ

帝都辺境にある村……カムラ村と呼ばれる村に1つの命が産み落とされる。

「おめでとうございますーよく頑張りましたねー！元氣な男の子ですよー」

助産師が生まれたての赤子をお湯で洗い、清潔な布に包むと赤ん坊の母親である、色白で、尚且つ髪の毛も白銀の女性の隣に赤ん坊を寝かせた。

女性の顔には疲れが浮かんで見えたが、彼女は赤ん坊を見ると大粒の涙を流しながら嬉しそうに笑みを浮かべた。

「よかったあ……」

母親である彼女は、赤子の頭を優しく撫でながら言うと、赤子もそれに答えるように指を握る。

彼女が苦笑を浮かべながらそれを見てみると、病室の扉が勢いよく開く。

銀髪をオールバックにした筋肉質な男性が心配そうに入ってくる。

幾度もの危険種との戦闘で傷つき、鍛え抜かれた体に気圧されそうだが、そんな威圧感は今も鳴りを潜めている。

「ゆ、ユミル！大丈夫か!？」

「ええ、大丈夫よウイル…元気な男の子だって」

そう言いながらユミルと呼ばれた女性は、夫であるウイルに微笑みかける。

ウイルも安堵したのかほっと胸を撫で下ろし、彼女の手を握る。

「ありがとう、ユミル！よくがんばってくれた…!!」

「もう、泣き過ぎよ」

傍らで感謝の言葉を涙ながらに言うウイルにユミルは苦笑する。

「つか黒髪か…俺らと全然似てないな！ハハハハ！」

ウイルが我が子の頭を撫でながら笑う。

「それで…名前はもう決めてあるの？」

「ああ…ユミルと俺の名前を少しずつもらって『ユウイ』ってのはどうだ？」

「ユウイ…あなたはユウイよ。私たちの元に生まれてきてくれて、ありがとう」

ユミルは優しく赤子の手を握る。

それに被せるようにウイルの大きな手がそれを覆う。

2人はこれから3人で幸せに生きようと誓う。

しかし…

それから7年後、悲劇は起きた。

3人で少し隣村まで出かけた帰り道、家族は運悪く超級危険種に遭遇してしまう。

まるで巨大な狼を彷彿とさせる見た目をしており、全身から青白い炎を絶え間なく放出している。

一撃で馬車は粉碎され、今年で7歳になる少年とその母親であるユミルが馬車から投げ出される。

2人に凶爪が迫るも、ウィルがなんとかその腕に刃を立てる。

「俺の家族に…手え出してんじゃねえ!!」

しかし相手は超級危険種。

抵抗虚しくまるで紙を破くかの如く容易にウィルの体を引き裂く。

その際、振るわれた危険種の腕から飛び散った血が偶然子供の顔にべつとりと付着する。

その瞬間、子供の体は突如として燃え上がり、我が子を守ろうと子供に覆いかぶさっていた母親を焼き殺してしまった。

両親は死に、自身の身に呪いを宿してしまった少年のみが残ってしまった。

「…どうだ、笑えるだろ?」

青年は不気味に顔を歪ませながら小さく笑う

あの凄惨な事故から約15年

帝都の裏路地に倒れ伏す男を青年は見下ろしている。

男は帝都で働く帝都警備隊に所属しており、4人1組でパトロールをしている最中に不審な青年を発見した。

その青年は2つの焼死体を眺めながら笑っていたのだ。

そして戦闘を開始したが程なく敗退。

自分以外の仲間はずでに力尽きてしまった。

男の両足は酷く焼け爛れており骨が露出している。

「この…化け物め…」

やがて男は痛みには耐えられず、気を失う。

「せっかく昔話してやったのに…」

そう呟きながら青年…ユウイは右手の掌を男に向け、そのまま炎を放つ。

「ならせめて薪にでもなってる」

死体には目もくれずロングコートを翻しながら路地裏を後にする。

路地裏には6つの焼死体のみが残っていた。

今から8年前

悲劇を生き延び、7年の月日を経て14歳になる少年は来る日も来る日も修練に明け暮れている。

顔に危険種の血液が付着した際、偶然飲み込んでしまったことで意図せず少年は異能を手に入れた。

異能は両腕の前腕から蒼い高火力の炎を放出するというシンプルな力なのだ：

問題はこの異能だ。

体に宿ってから7年ほど経つのに全くと言っていい程制御が出来ない。

出す、出さないの制御は出来るのだが、いかにせん火力調節が全くきかない。

使えばいつも最大火力のため、自分の体すらも焼いてしまう。

「あつっ!!」

う。今日も制御練習兼食料調達のために危険種を狩っているのだが、また失敗してしま

う。「なんで…うまくいかないんだろ…」

場所は帝都近郊に位置するジフノラ樹海の内部

巨大な木の根本に腰を下ろし頭を悩ませていると、周囲から複数の足音がする。

(足音!?!なんでこんなところ!?!)

俺は咄嗟に身をかがめ身を隠す。

すると茂みから2つの影が飛び出す。

影の正体は2人の少女だ。

ボロボロの衣服を纏い、髪を腰まで伸ばした赤目の少女とこちらもボロボロの衣服を纏った黒目の少女。

(俺よりも5、6歳下か?にしては動きが良すぎるな…)

2人は年齢に見合わない身のこなしで危険種の命を刈り取って行く。

俺は心配ないとなとその場を後にしようとした時少女から悲鳴が漏れる。

「わああ!!」

「クロメツ!!」

黒目の少女が危険種に押さえ込まれてしまっている。

このままでは彼女は死んでしまうだろう。

「チツ…」

俺は舌打ちしながら右手を少女…ではなく少女に覆い被さる危険種に向ける。

「こんな時ぐらい上手くいってくれよ!」

俺は炎を放つ。

俺の心配を他所に蒼炎は危険種を焼き殺す。

「うわあ! あつい!?!」

「きみ！大丈夫!？」

俺は飛び出し、少女：クロメに駆け寄る。

見るとクロメは腕に火傷を負ってしまっている。

「ごめんな…まだ加減が上手くできなくて…」

俺は謝罪しつつある植物を握り潰し、漏れ出た液を火傷跡に塗る。

「痛っ…」

「少し染みるが我慢してくれ」

自分の服を少し破いてクロメの腕に巻く。

ある植物とはアロエのことだ。

俺はまだ炎の威力を制御出来ない為よく火傷を負うので、危険種狩りに出かける際の

必需品だ。

「クロメ！」

クロメの応急処置を終えた頃、離れた場所で危険種を討伐していたもう一人の少女が

駆け寄ってくる。

「お姉ちゃん！」

「妹を助けてくれてありがとう。私はアカメだ」

「構わないよ。俺はユウイ」

俺はアカメに出された手を握る。

「私はクロメだよ！助けてくれてありがとう！」

「だからいいって。これから樹海を進むんなら気を付けろよ」

俺はそう言つて2人と別れる。

それからさらに7年

ユウイは21歳となった。

7年に及ぶ修練の結果、ユウイは炎を自在操れるようになっていた。

デメリット存在するが、それを差し引いてもユウイの戦闘能力は高かった。

そんな俺が今何をしているかと言うと……捕まっている。

3日ほど前

たまたま立ち寄った村が盗賊団に襲われており、助けに向かったのだが、村人を人質に取られてしまい俺が身代わりになることになったのだ。

「オラオラ！数日前までの威勢はどうした？ギャハハ！！」

盗賊は俺の体を殴る蹴るの暴行を加えて楽しんでる。

「うぐっ……ガハッ……」

口から血反吐を吐く。

こんな目にあっているのに、俺は異能を使わなかった。怖かったのだ。

人にあの力を使うことをずっと躊躇っていた。

そんな生活が約半年も続いた頃

食事もほとんど与えられず、睡眠もろくにさせてもらえない。

そんな劣悪な環境は青年の精神を蝕んでいった。

(俺は……こんなところで何やってんだ?)

自分がいる部屋には盗賊が14人。普通に戦っても勝ち目はないだろうが、異能を……炎を使えば簡単に終わる。

「クッ、クククク……」

「な、なんだコイツ、急に笑い出しやがって……ついに壊れたか?」

盗賊は気味が悪そうに俺を見る。

そんな視線を意に介さず俺は縛られている両腕から蒼炎を放出する。

「コイツ体が急に燃えやがったぞ!!」

(何を我慢してんだ俺は! 最初っから殺せばよかつたんだ! こんな奴らに躊躇う必要なんてなかつたんだよ……殺す。コイツら全員殺してやる……)

俺を拘束している手枷を炎で破壊する。

「なあ……ゴミども。骨も残らず消し飛ばしてやる」

俺はこの日、盗賊たちのアジトを崩壊させた。

この瞬間、俺の中で何か音が立てて崩れていった。

それから半年の時間をかけ、ユウイは帝都に到着した。

一話 首斬りザンク

帝都の辺境に位置する場所

ここには帝都でも有名な殺し屋集団であるナイトレイドのアジトがある。

ナイトレイドのマークが堂々と飾られた大部屋。

その中央には厳つい義手を装着した白髪のイケメンな男性：ではなく女性はナジエ
ンダ。

元帝国將軍であり、現在ナイトレイドのボスの役割を担っている。

ナジエンダは今回の標的を皆に説明する。

「今回の標的は帝都で噂の連続通り魔だ。深夜無差別に現れ、首を切り取っていく…も
う何十人殺されたかわからん」

「その中の3割は警備隊員なんだろう？強えな」

茶髪の少年：…タツミは今回の被害を考えながら息を呑む。

「間違いなくあの”首斬りザンク”だろうね」

タツミと違い、緑髪にゴーグルをつけた青年：…ラバックは現状を細かく分析してい

る。

「なんだソレ？」

「知らないの？ほんとド田舎に住んでたのね」

「私も知りません…」

眼鏡をかけた紫髪の女性：シエーレもタツミに便乗する。

「シエーレ…アンタは忘れてるだけでしよう…」

そして改めてタツミの疑問にツインテールの少女：マインが説明する。

「首斬りザンク…元は帝国最大の監獄で働く首斬り役人だったんだけど、大臣のせいで処刑する人数が多くてね。何年も続けているうちに首を斬るのがクセになったそうよ」

マインが細かく説明する。

「そりやおかしくもなるわな…」

「討伐隊が組織された直後に姿を消しちまったんだが…まさか帝都に出てくるとはな」

立派なリーゼントを携えた大男：ブラートが補足する。

「ザンクは獄長の持つていたが帝具を盗んでいる。十分用心しろ…それと最近帝都で焼死体が相次いで見つかる事例が報告されている。こちらも気をつけておけ」

「焼死体か」

黒髪を腰まで伸ばした赤目の少女：アカメが小さく呟いた。

同時刻帝都にて

「『首斬り』ねえ…」

ユウイは手配書を眺めながら呟く。

「何かお探しかな？」

突如背中から声をかけられる。

「あ？誰だお前？」

振り向いた先にいたのは額に目の様な装飾品を身につけた大男。

「ああ…失礼。『首斬り』ザンク。よろしく頼むよ」

「…茶毘だ。よろしく」

お互いに殺意をぶつけ合いながら2人は不気味に笑っていた。

まるで面白い獲物を見つけたかの様に…

先に動いたのはユウイだった。

ゴオッ！

ほとんどノーモーションで炎を放つ。

「ああ…愉快愉快」

「今のを避けんのかよ……」

不意打ちであり必殺の一撃を躲され俺はダルそうに悪態をつく。

「君いいねえ……オレの干し首コレクシヨンに加えてやろう」

「いや、遠慮しとく」

ザンクは俺の攻撃をことごとく躲して行く。

（なんだ？心でも読まれてんのか？）

「ピンポン。俺の帝具【五視万能・スペクテッド】の能力の一つ、これは洞視だな。表

情を見て相手の思考を読み取る、まあ観察力が鋭いの究極系だな」

「なんだそりや、反則だろ」

めんどくさそうに呟きながら続け様に炎を放つ。

「ほお最大火力か……怖いねえ」

ゴオオオオオオ!!!

先ほどとは比べ物にならない規模の炎がザンクに迫る。

「危ない危ない」

ザンクはそれをも簡単に躲す。

「これも避けんのかよ……」

俺の右手は最大火力の代償に大火傷を負う。

(はあ…心を読まれるってのはこんなにもやりにくいのかよ)

俺はザンクと戦闘を続行する。

「私達の受け持ちはこの区画だ」

タツミ・アカメペアは帝都でターゲットであるザンクを暗殺すべく帝都を探索している。

「帝都住民は辻斬り怖さで外出していないな。逆にやりやす……ムグツ!?」

タツミの発言を遮り、アカメはタツミを無理矢理柱に隠す。

「帝都警備隊だ。ああいう連中もいる。気をつけていこう」

アカメたちは帝都を探索しているとどこからか何かが焦げる様な臭いがすることに気づく。

「なあアカメ…何の匂いだろ、これ」

「何か焦げている様な匂いだな。二手に分かれて探してみよう」

「了解!」

アカメとタツミは素早く指示を出し合い、二手に分かれて夜の帝都に消えていった。

アカメと別れたタツミは青白い光を発見し、その場所に向かっている。

「え!? 何だこれ!？」

現場に到着したタツミは目を疑っていた。

額に目? の様なものを付けた大男と両腕に火傷を負っている長身の男が戦闘を繰り広げていた。

(ああ…:ダルい)

そんなことを考えながらも攻撃の手は緩めない。

「そろそろ両腕が痛くなってきたんじゃないか?」

「気にすんな」

確かにもう両腕はボロボロだが、まだ動ける。

何度か攻防を繰り返していると、背後から少年? の様な声がする。

「え!? 何だこれ!？」

「あ?」

俺は咄嗟にザンクの視界を奪う。

(どうやら視界を封じられると帝具は使えねえみたいだな)

俺は爆発を推進力に剣を背負った少年のもとに向かう。

「うわっ！なんだ!?!」

少年は驚きの声を上げる。

(まだ若いな…俺よりも5、6歳下か?)

「おいガキ…こんなところでなにしてんだ？危ねえからさっさと帰れ」

俺がそう忠告してやると

「お、俺…『首斬りザンク』って奴を倒しにきたんだよ！おちおち帰れるかっての!」

「ここにきた動機に驚く。」

「つてことは戦えるつて事だよな？」

「お、おう」

「俺も事情があつてそいつを消したいんだわ。」

「ザンクを倒すのを手伝ってくれつてことか？」

「ああ。礼はアイツの懸賞金の半分でどうだ？」

「そんなのいらねえよ！俺は街の人たちが安心できるならなんでもいい!」

「へえ…大層な志をお持ちのようで…今は”茶毘”で通してる。短い間だがよろしく頼

むぜ」

「おうーよろしくな」

俺が少年と取引を終え、改めてザンクに向かい合う。

「2対1か…」

ザンクが考え込む様に呟く。

「いくぞっ！」

すると少年がザンクに向かって突撃する。

俺はそれに合わせる様に左手を突き出し、炎を放つ。

本来なら少年と俺の心は読まれ避けられる筈…だがザンクは少年の攻撃を避けきれなかった。

「くっ…」

「あれ!?!心読めるんじゃないやねえのかよ?」

少年が少し戸惑う。

(ああ…なるほど)

俺は一つの結論を出す。

「お前…心読めるって言っても1人だけなんだろう?」

俺の発言にザンクは目を見開く。

「凶星か?ならどつちの心を読むべきか、よく考えるよ?」

俺はそう吐き捨てながら炎を放つ。

「おい…俺の炎に合わせろ」

「っ！了解！」

「この…クソツ！」

（アイツは十中八九俺の心を読んで来る筈…なら俺は牽制し続けりゃいい。あとはアイツの技量次第だな）

俺の負けがあるとなれば少年がザンクに殺されること。そうなれば再び俺が後手に回ることになる。

そんな俺の危惧は杞憂に終わる。

「へえ…アイツやるじゃねえか」

少年はザンクと互角以上に斬り結んでいる。

「首ばっか斬ってた様な奴に負けるかよ!!」

少年は威勢よく吠える。

すると、突如としてザンクの動きが少年に追いついて行く。

「黙れ!!」

「!？」

ザンクは帝具を俺ではなく少年に使用する。

ザンクの2本の刃が少年の首に迫り、そのまま少年の首を……斬ることは無かった。俺は炎を放ち、ザンクの剣を破壊する。

「なっ!?!」

「…俺から目、離しちゃダメだろ」

帝具の縛りから解放された俺はザンクとの距離を一気に詰める。

俺の両腕は度重なる火炎放射でもうボロボロだ。

特に右手はもうダメだ。

(だが…)

俺は左手をザンクの至近距離で向ける。

(右手は最初の最大火力から既に限界…だからこれで本当に最後の最後…)

「あばよ」

序盤に出した今自分の出せる最大火力をお見舞いする。

咄嗟に俺の思考を読んだザンクは叫ぶ。

「畜生おお!!」

「あばよ」

ザンクは蒼炎に飲み込まれ、断末魔をあげる。

「すっげえ…」

少年は小さく呟く。

よく見ると少年は至る所に傷がある。

「…悪かったな。巻き込んじゃまって」

「いや…俺こそ助かったよ。俺だけじゃ絶対勝てなかったから…」

お互いに礼を言い合っていると、少年が質問してくる。

「なあ…アンタはなんでザンクと戦ってたんだ？」

「別に理由なんてねえよ。ただ…」

「ただ？」

「気に入らなかつたからかな」

俺は少年に自分が殺しを行う理由を話す。

「俺は今を壊す。そして証明する。『救われなかった人間などいなかった』とへらへら笑つてるこの国をな」

話していると周りから複数の足音が迫る。

「ああ…帝都警備隊か？まあ、これだけ派手に騒いだらそりや来るよな…おいガキ…？」

さつきまで少年がいた場所を見てみが、少年はおらずザンクの額にあるはずの帝具が消えていた。

「…まあ、いいか…」

足音がして逃げるといふことは何か事情があるのだろう。
俺は深く考えず、警備隊員に事情を聞かため連れて行かれた。

タツミは帝都警備隊が迫って来たため、急いでその場を後にした。

ついでにザンクの帝具を持ってきた。

「タツミ…どこ行ってたんだ？」

アカメはタツミの傷だらけの体を確認すると事情の説明を求めてくる。

タツミは先ほどの出来事を説明し、ザンクの帝具「スペクテッド」をアカメに渡す。

「だび」と名乗った青い炎を操る男…か」

「うん。何か知ってんのか？」

「いや…ボスに報告しよう。タツミ、帝具の回収…苦労だったな」

二話 ナイトレイドとの遭遇

ザンクとの戦闘から4日

俺は帝都警備隊にお世話になっている。

「では！私はパトロールに行つて参ります！」

「キユウ！」

「おう」

元氣よく挨拶をしながら部屋を飛び出して行つたのは俺をこの部屋に居候させてくれている茶髪のポニーテールがトレードマークの少女。

名をセリユー・ユビキタスという。

帝都警備隊の中で唯一帝具を所有している人物だ。

最初は歪んだ正義感を持っており、俺も殺していいと認識していたのだが、俺の考えを聞き心を入れ替えてくれた。

素直な奴は嫌いじゃない

俺の腕はザンクとの戦闘により大火傷を負っていたのだが、回復力には自信があり2日も経てばほぼ完治している。

(改めて見るとやっぱ人間じゃねえんだよなあ…)

俺はふとそんな事を考える。

「チツ…ネガティブなのはよくねえ…」

翌日

「おい」

「はい？なんですか？」

俺はパトロールに出ようとしていたセリユーに声をかけた。

「なんか出来ることねえか？貸を作るのは性に合わねえ」

「ええ…そう言われても…」

セリユーは少し考えたのち「そうだっ！」と声を上げる。

「なら今夜こっそり私と一緒にパトロールしましょう！」

「ええ…」

「嫌ですか？」

「いや……」

正直めんどいが、自分から言い出したことなので付き合うことにする。

そして夜。

約束通り俺はセリユーと帝都をパトロールしてる。

「悪、いませんねえ」

「平和って事だろ？ いいじゃねえか」

「なら、二手に分かれて探しましょう！」

「そうだな」

話合いの結果、一時間探して何も無かったら帰るということになった。

「では！一時間後に！」

それから数分。

「なんもねえな…」

もう何もないだろうと思っていた時…

突如セリユーが向かった方角から笛の音が響く。

「チッ」

俺は笛の音の方角に走った。

「やっぱり2人で手分けしてみるものだね、コロ」

「キユウ」

「くつ、なんでこんなところに警備隊がいるのよ……!!」

「しかも、気配が有りませんでした……」

「それにあの生物……文献で見たことがある。帝具だ」

とある夜中。

ユウイと別れ、人通りのない街の広場で対峙する4人と一匹。

ツインテールの少女と長髪の女性が少しばかりの動揺を見せる中、冷静に状況を判断する赤目の少女と対峙したセリユウは己の相棒であるコロを抱いて真つ直ぐ二人に指を突きつけた。

「手配書の似顔絵と顔が一致したため、ナイトレイドのシエーレ、アカメと断定。もう一人も手持ちの帝具により仲間と判断」

鋭い視線で3人……アカメ、マイン、シエーレを睨む。

「見つかったなら、連れていくか殺すか何だけど……」

「連れていく、という選択肢は選べそうにないですね……」

「敵なら葬る」

そんなセリユウの様子を見た3人は何時でも戦闘に入れるように己の帝具を構える。

殺意をもってぶつかれば、どちらかが死ぬ。

両者相討ちはあつても、生存はあり得ない。

それが帝具の法則。

「昔の私なら、あなた達を見ただけで敵と判断して殺しにかかつてた……」

そんな中でセリユーは一人、昔のことを思いだす。

父が賊によつて殺され、正義という言葉に盲目的になり悪の殲滅に全てを捧げていた自分。

当時の自分を思い返すと、どれだけ狂っていたのかがよくわかる。

おまけに信頼していた師匠がが悪事を働いていたのだ。

昔の自分が愚かだったとしか思えない。

そんな自分の価値観を変えてくれた人がいた。

その人はボロボロのロングコートを羽織り、両手に大火傷を負った青年だった。

ユウイと名乗った彼は自分の理念を語ってくれた。

私を正しい道に引き戻してくれた。

『一回視点を変えなきや見えねえ景色もあるもんだ』

セリユーは改めて3人に向き直る。

「ナイトレイド、あなた達達のやっていることは殺人者であるとはいえ、立派な正義だと私は

思ってる。事実、その行いで多くの市民が助かっていることも私は知っている」

「へえ……じゃあ何？ 私たちの仲間にもなる？」

「それはない」

マインの誘いをバツサリと切ったセリユー。

その言葉にははつきりとした意思が感じられる。

「あなたたちがそうするだけの目的と意思があるのは分かってるし、咎めるつもりは元々ない」

「なら……」

「でも」

何かを言おうとしたシェーレの言葉を遮り、セリユーは続ける。

「それはあくまでも私個人の事。警備隊の一員として相對したなら、あなた達は敵だ。なら……」

腕に抱いていたコロが地面に降り立ち、堂々とした様子で二人の前に立ちはだかる
「私たちの正義と、あなた達の正義。ぶつかり合うより他はない!!」

深夜の月の下、4人の帝具使いの戦闘が始まった。

俺が笛の音の元に着く。

笛の音はやはりセリユーが鳴らしたものだつた。

セリユーの両腕は切断され、人体改造によつて仕込まれていた銃が露出している。

(アイツ……まだ生きてるよな?)

改めてセリユーの安否を確認していると、眼鏡をかけた長髪の女が巨大なハサミの(おそらく帝具だろう)刃が迫る。

流石にこのまま見殺しには出来ないため、セリユーとハサミの間に炎の壁を発生させる。

「世話焼かせんなよな」

俺は呆然とするセリユーに声をかけた。

「ゆ……茶毘くん!」

「何者!?!」

「青い炎……報告にあつた”だび”という方でしょうか?」

「ああ……間違いない」

ツインテ少女と手配書と顔が一致している2人……アカメとシエーレが各々の反応を示す。

「ああ？なんで俺のこと知ってたんだ？」

俺がシエーレに問いかける。

「最近、帝都で焼死体が数多く見つかっているのですが…心当たりありませんか？」

「え？噂になってる？嬉しいねえ…」

俺はそういいながら炎を放つ。

「くっ…!？」

「ちよっ…帝具使い3人を相手に戦う気!？」

「正気じゃありませんね」

「んなことねえよ…」

俺は心外だと言わんばかりに口を開く。

「セリユーはさつき笛を鳴らした…って事はもうすぐ誰か来んだろ？足止めぐらい出来るやい」

俺はそう言うのと今度はセリユーの帝具【魔獣変化・ヘカトンケイル】ことコロに視線を向ける。

「おい犬ところ…動けるか？」

「き、キュウ！」

俺の問いかけにコロは大きく鳴く。

「…これで3対3ですね…」

セリユーがふらふらと立ち上がる。

「んな状態で何が出来るんだよ。大人しく座ってろ」

俺は呆れながらセリユーを座らせる。

「3対1に変わりねえよ。犬っころ、ソイツ守ってろ」

「キュル！」

「上等…」

俺はコロの返事を聞くと戦闘を開始する。

俺は左手の掌を向ける。

「じゃあ手始めに…ほらよ」

かざした左手から一直線に炎を放出する。

するとシェーレが炎と2人の間に入り、帝具を盾にする。

「はあ…最近炎が効かねえ相手、多すぎないか？」

「それは…残念ね！」

俺が凹んでいるとそこにツインテが手にしたライフルからビームが放たれる。

「つぶねえ…」

「エクスタス!!」

俺がツインテの攻撃を避けた瞬間、俺の目の前が眩い光に覆われる。

「!?」

「葬る」

俺が視界を奪われた瞬間、背後から凄まじい殺気が迫っていることに気づき爆炎を利用して咄嗟に避ける。

その際、右手の甲を薄く切り裂かれる。

「つたく…突然の光には耐性がついてると思ってたんだが…」

俺は視力が回復すると同時に右手に鋭い痛みが走る。

「あ?」

俺が右手に視線を移すと見慣れない文字?の様なものに蝕まれて行く右手。

そしてアカメが口を開く。

「お前は一斬必殺の刃に斬られた。呪毒だ…もう助からない」

呪毒の浸食は手首まで及んでいる。

「はあ…ならしようがねえよなあ…!」

俺は右手を3人に向け、最大火力を放出する。

「!?エクスタスでは防ぎ切れません!」

「はあ!?嘘でしょ?」

「凄まじいな…」

3人は俺の予想通り炎を避ける。

「はっ！でも最後の悪あがきね！村雨に斬られたんだからもう長くは…」

ツインテは俺を指差しながら捲し立てる。

「いや…凄いな…」

だが、ツインテの言葉を遮る様にアカメは俺に目をやる。

「はあ!?なんで死なないのよ！一斬必殺でしょ!?!」

「アイツは…自分の右手ごと呪毒を焼き払ったんだ…」

その通り。

俺が最大火力を3人に放ったのは別に倒す事が目的じゃない。

呪毒を焼く事が目的だった。

最大火力はその威力の代わりに想像以上に負荷がかかるし、本来長時間放出出来ない、持って5秒程度だろう。

しかし今回は事情が事情、10秒を超える大サーブスだ。

結果俺の右手は骨が露出する程の大怪我を負うが、同時に呪毒は完全に燃え尽きていた。

(代償は右手一本…まあ死ぬよかマシだろ…)

「ですが…無傷ではない様です。このまま3人で畳み掛ければ…」

シエーレが追撃を仕掛けようとするが、俺はそれよりも早く生き残っている左手でジェットエンジンの様に炎を放出し、勢いに乗せた蹴りを放つ。

「ぐっ…」

蹴りはシエーレの左腕をへし折る。

その拍子に彼女はエクスタスを手放してしまう。

シエーレは帝具を取ろうと動こうとするも…

それはある音によって遮られる。

ある音とは複数の足音だ。

「はあ…ようやく来たのか。遅せえ…」

「ここは引くべきね」

「帝具は惜しいが…命には変えられない」

「すみません…」

「そりや賢明だな」

3人が撤退しようとした際、アカメがふと妙な事を言ってきた。

「なあ…」

「なんだ？」

「私達…どこかで会ったことがあるか？」

「ああ…：さあな」

俺は少し悩み答える。

心当たりがなかったわけじゃない。

それでも言う必要はないと判断した。

「そうか…」

アカメはそれだけ言うところと共に撤退していった。

それを見送った俺は

ドサツ

と音を立てて座り込む。

「ああ…痛つてえな」

俺が右手を見る。

すでに再生が始まっている。

「ごめんないー！」

セリユーが俺に抱きつく。

「痛てえって…」

「私のせいでごめんなさい…：ごめん…：うう…」

泣き出したセリユーに左手で頭を撫でる。

「はあ……どうせすぐ治る……気にすんな」

俺はセリユーを宥め続けた。

三話 イエーガーズ

ナイトレイドとの邂逅から数日

「…ダルい」

俺はナイトレイドとの戦闘で負った傷（まあ全部自爆なんだけども）の治療のため療養生生活を余儀なくされている。

「もう！そんなこと言っちゃダメだよ！」

セリユーは俺の右手の包帯を取り替えながら俺を叱る。

あらかた傷は塞がっているのだが、右手だけはまだ完治には至っていない。

「でももう骨は見えてないね！よかった！」

「そうだな」

俺はこの数日間ほぼ全ての時間を治療に使っているため体が常にダルい、そして眠い。

「おい！セリユー！召集かかってるぞ」

「え？！」

「なんでもエスデス將軍の組織する部隊に選ばれたんだってよ！ユウイさんもだぜ！」

「はあ……？」

病室に突然駆け込んできた帝都警備隊員がそう口にする。

「はあ……めんどくせえな」

「やった！やったねユウイクン！」

「なんでだよ」

面倒臭がる俺とは対照的にセリユーはえらくハイテンションだった。

「……………眠い」

俺は集合場所に指定されている”特別警察会議室”に到着した。

「ああ？……まだ誰もいねえのかよ」

俺は中央に用意されていた7つの椅子の一つに腰を下ろす。

そして机に突っ伏した。

帝都メインストリート

俺の名はウエイブ。

帝国海軍で戦ってきた海の男だ！

このたび帝国の特別警察から招集がかかった。
栄転ってヤツだ。

「よしー」

ここに俺の同僚となる連中がいるわけだ。

(最初が肝心！舐められないように行くぜ!!)

「こんにちはー帝国海軍から来まし……た……」

俺は勢いよくドアを開け、元氣よく挨拶をした。

部屋の中にいたのは2人。

1人は机に突っ伏した黒髪の男。

そして顔全体を覆うマスクを被った拷問官を彷彿とさせる出立の大男。

俺は拷問官から一番離れた席に座った。

次に入室してきたのはセーラー服を着た黒目の女の子……クロメだった。

普通の女の子だ！と最初は思ったのだが、クロメは入室直後に目を見開き机で熟睡している青年の顔をこれでもかと覗き込んでいるのだ。

その後も力オスな展開が続いた。

警備隊所属と名乗った女の子…セリユーと金髪の美青年…ランはまあいい。
問題は最後。

変な仮面つけた変態どもにレッドカーペットをひかせて、その上を歩くそのオネエ
…Dr. スタイリツシュがヤバイ…

(なんなんだよこの集団!?)

俺はもう帰りたくなっていた。

俺が机で熟睡を決め込んでから数分。

周囲が少し騒がしくなってきた。

「あ?」

俺が顔を上げると1人の少女と目が合った。

「あつ……ユウイ……お兄ちゃん?」

(?なんで俺の名前知ってるんだ……?)

思考が追いつかないまま少女が俺に抱きついてくる。

「会いたかったよ!お兄ちゃん!!」

「えっ…は？」

俺は椅子から吹き飛ばされ、少女に馬乗りになれる。

セーラー服に身を包んだ黒目の少女。

そして左腕にボロボロの布を巻いている。

「私だよ！クロメ！憶えてない？」

と自分の左手についている火傷の跡を見せながら自己紹介してくる。

「それ………ジフノラ樹海の時の？」

「そう！」

「…傷、残っちゃったんだな」

「全然平気だよ」

俺はひつついてくるクロメを一旦引き剥がす。

周囲には7人。

すでに全員揃っている。

ガチャ

メンバーはすでに全員揃っているはずなのに新しい仮面の人物が入室する。

「お前達、見ない顔だな！ここで何をしている!!!」

（おいおい…そりゃねえだろ…）

始めにウェイブが蹴り飛ばされ、セリユーとコロが無力化された。

「はあ…コロ、伏せろ」

俺はクロメと交戦してる仮面の襲撃者に炎を放つ。

それを躲した襲撃者は狙いを俺に変更し、打撃を繰り出す。

「突然現れて随分な挨拶だな…誰だよアンタ？」

俺はなんとか攻撃をいなしながら質問してみる。

数回の攻防の際に一瞬開いた横つ腹に蹴りを入れる。

しかし、その蹴りは分厚い氷に遮られた。

「ほお、やるではないか」

襲撃者は俺に称賛を向ける。

「めんどくせえから早く死ねって」

続いて顔面に炎の推進力によって加速した拳を突き出す。

先程よりも高威力なのは氷の壁の対策だ。

ゴンツ!!

またしても分厚い氷に遮られるが、衝撃で仮面が破壊される。

その素顔は誰も予想できないものだった。

「え、エスデス將軍!？」

拷問官の様な大男…ボルスが声を上げた。

先程の攻防から数分。

俺たちは襲撃者…エスデスの引率のもと宮殿内を歩いている。

「さっきの趣向は驚いたか？普通に歓迎してもつまらんと思ってたな」

エスデスは俺たちに感想を求め。

「荒々しいのには慣れてますから…」

とウエイブが疲れながら伝える。

「むしろご指導ありがとうございます!」

とセリユーは逆に礼を告げる。

そして…

「ユウイくんはどうだった?」

俺に振ってくる。

俺は眠い状態からの襲撃だった為、すこぶる機嫌が悪い。

「……………」

「どうだった?」

俺が無言を貫いているとエスデスが追撃の様に聞いてくる。

「あ？死ねよ」

「ハツハツハ、辛辣だな」

とエスデスは俺の暴言を咎めるわけでもなく笑っていた。

「よし！では陛下と謁見後、パーティーだ」

突然我らが隊長から爆弾が投下された。

隊員の反応はそれぞれだ。

「い、いきなり陛下と!?!」

「初日から随分飛ばしてるスケジュールですね」

「面倒事はチャツチャと済ませるに限る」

なんてガサツな性格してるんだ…嫌いじゃないけど。

「それよりエスデス様。アタシ達のチーム名とかは決まってるのでしょうか?」

「うむ」

オカマの質問にエスデスはゆっくりと組織の詳細を説明する。

「我々は独自の機動性を持ち、凶悪な賊の群れを容赦なく狩る組織…ゆえに、特殊警察

【イエーガーズ】だ」

謁見を終えた俺たちは各々自由に過ごしていた。

「少しいいか？」

エスデスは俺に聞いてくる。

「なんだ？」

「半年前、帝都近郊の古城を根城にしていた盗賊団がたった一夜にして焼き殺される事件があつたが…心当たりはないか？」

「私、その事件知ってる！」

「俺も聞いたことあるぜ！噂だけど」

いつの間にか料理を終えたボルスとウェイブが合流する。

「…聞いてどうすんだ？」

「あるみたいだな」

「なあウェイブ、ゴミってお前ならどうやって処理する？」

「え？そうだな…一箇所に集めてから燃やす…とか？」

「そういうことだよ」

俺は例え話を交えながら、遠回しにエスデスの問いに肯定する。

「なるほどな。その力、期待しているぞ」

「そりやどうも」

「ところで帝具が一つ余っているという報告があつたが？」

エスデスはセリユーに視線を移す。

「あ…は、ハイ。ナイトレイドから回収したハサミ型の帝具があるんですが適格者が見つからなくて…」

「そのままでは大臣に回収されてしまうな…勿体ない。使える人材を探しつつ、余興でもするか」

エスデス主催で都民武芸試合が開催されることとなつた。

武芸試合当日。

「いかがですか隊長。あの者達は」

「つまらん素材らしく、つまらん試合だな」

ランの問いに心底つまらなさそうにエスデスは答える。

ちなみに俺はエスデスの背後で椅子に座り、居眠りを決め込んでいる。

「次の試合が最後の組み合わせですね」

「ん？終わったか？」

俺は目を覚まし、ランに状況を聞く。

「ええ…隊長が少年を攫つて来てしまいました…」

「なんでそうなんだよ」

俺とランは呆れ果てて思考を放棄した。

イエーガーズ本部

「という訳でイエーガーズの補欠となったタツミだ」

「お前…つくづく運がないな…」

「あつ！茶毘！た、助けてくれ！」

「やだよ…めんどくせえ」

俺はタツミを見捨てる。

だつてダルいもん。

「市民をそのまま連れて来ちやつたんですか？」

「なに…不自由はさせないさ。それに感じたんだ…タツミは私の恋の相手にもなるかな」

ボルスの問いにエスデスは自慢気に答える。そういう問題じゃないだろ。

「それでなんで首輪させてるんですか？」

「…愛しくなったから無意識でカチャリと」

「ペットじゃなく、正式な恋人にしたいなら違いを出すために外されては？」

ランの提案に少し考ええると、エスデスはタツミの首輪を外す。

「そういえばこのメンバーの中で恋人がいたり結婚している者は？」

この問いにボルスが手を挙げる。

「ボルスさんそうなんですか!？」

セリユーが驚いた様に声を上げる。

「うん…結婚6年目!もうよく出来た人で私にはもったいないくらい!!」

ガチャツ

ボルスの惚気話を聞いていると、突然扉が開かれる。

入ってきたのは1人の帝国兵。

「エスデス様!ご命令にあったギョガン湖周辺の調査終了しました!」

「…このタイミング…丁度いいな。お前達初の大仕事だぞ」

帝国兵の報告を聞き、エスデスは小さく笑う。

「最近ギョガン湖に山賊の砦が出来たのは知っているな」

「もちろんです!帝都近郊における悪人達の駆け込み寺…問題視しました」

セリユーが顔を歪める。

「うむ、ナイトレイドなど居場所が掴めない相手は後回しだ。まずは目に見える賊から潰してゆく」

「敵が降伏してきたらどうします隊長？」

「降伏は弱者の行為…そして弱者は淘汰されるのが世の常だ」

エスデスはボルスの問いかけに冷たく言い放つ

「お厳しいことで」

「不満か？」

「生憎加減が苦手だからな…気にせずやれるのは楽でいい」

「そうか…皆に出陣前に聞いておこう。1人の数十人は倒してもらおうぞ。これからはこんな仕事ばかりだ…きちんと覚悟は出来ているな？」

エスデスの確認に各々の意思を持って答える。

「私は軍人です命令に従うまでです。このお仕事だって…誰かがやらなくちゃいけないことだから」

とボルス。

「同じく…ただ命令を粛々と実行する…今までもずっとそうだった」

とクロメ。

「俺は…大恩人が海軍にいるんです…その人にどうすれば恩返し出来るかって聞いた
ら、国の為に頑張って働いてくれればそれでいいって…だから俺やります！もちろん命
だつてかける！」

とウエイブ。

「私はとある願いを叶えるために…どんどん出世していきたいんですよ。そのために手
柄を立てる…こう見えてやる気に満ち溢れていますよ」

とラン。

「アタシの行動原理はいたつてシンプル…それはスタイリッシュの追求!!!お分かりです
ね？」

「いや分からん」

スタイリッシュの覚悟にエスデスは少し困惑している。

「ユウイはどうだ？」

続いて俺にも聞いてくる。

「俺はただ壊すだけだ。そして証明する…この世が間違つてるつて事をな」

「そうか。皆迷いがなくて大変結構…そうでなくてはな」

エスデスは小さく息を吸い…

「それでは出撃！」

大声で言い放った。

四話 初仕事

「ここは帝都近郊に位置するギョガン湖。

ここには山賊達の根城となっている砦が存在している。

「地形や敵の配置は頭に叩き込みましたが作戦はどうしましょう？」

ランはそう俺たちに確認を取る。

ランはその頭の良さからエスデスがいない場合の行動隊長に任命されている。

ちなみに副官は俺らしい…なんでだよ

「めんどいから正面突破で」

「正義は堂々と正面から！」

俺とセリユーが全く同じ意見を出す。

そして俺は砦を囲む様に高さ約15メートル程の炎の壁を発生させる。

「ユウイすげえな！」

「まあ努力の賜物だな。あと本部以外では茶毘で頼む」

「あつそうだった。すまねえ」

俺の炎壁を見たウェイブが声を漏らす。

これだけ炎を操れる様になるまでどれだけ腕に火傷を負ったことか…

「敵だ!!皆集まれ!!」

そして、それを見た見張り台の男が声を上げる。

すると俺たちはあつという間に包囲されてしまった。

「おいお前達!ここがどこだか知ってて来てんのか?ああ!」

「正面からとはいいい度胸じゃねえか!!」

「生きて帰れると思うなよ!!」

山賊達は俺たちに次々といかにも賊らしい言葉を投げかけてくる。

だがその中に俺の見過ごせないフリーズが入っていた。

「うっはーっ可愛い女の子もいるじゃねえか!たまらねえなあ連れて帰ってお楽し…ぐがああああ!!!」

下品な眼差しをセリユーとクロメに向けていた山賊。

俺は地雷を踏み抜いたそいつを炎で焼死体に変える。

「「「!?!」」」」

山賊達の視線が一気に俺に集まる。

「おい…セリユーはともかく、クロに色目使ってんじゃねえぞ…死なすぞ?」

「ちよっ!ユウイくん!私はともかくってどう言う意味!」

「お兄ちゃん…」

俺の言葉にセリユーは猛反発し、クロメはぼつと頬を赤く染める。
俺そんな変なこと言ったか？

「うう…!!納得いない!コロ!5番!」

まだ煮え切っていないセリユーはコロに素早く指示をする。

5番?何のことだ?

するとコロはなんとセリユーの右腕に噛みつく。

そしてコロが口を離れた時、セリユーの右腕には凶悪なドリルが露わとなっていた。

「また人体改造か?無理すんなよ」

「心配無用だよ…失った両腕の代わりにドクターから授けてもらった私の新しい力…

”十王の裁き”!もうユウイク…じゃなくて、茶毘の足は引つ張らない!」

そのまま敵を蹂躪しながら、続いて『7番』と叫び巨大なライフルを出現させる。

どう見てもセリユーよりデカイじゃねえか…どう言う原理だ?

「実に見事な殲滅力ですね」

「もうあいつ一人でいいんじゃないかな…」

ランとウェイブが声を漏らす。

「あんまり無理させたくねえんだが…」

「あら、いい観察力ね。そう、”十王の裁き”は強力だけど使えば使うほど使用者の体力を蝕む」

俺の予測はスタイリツシュによって肯定される。

「お前がアイツにアレ付けたのか？」

俺はスタイリツシュを睨む。

「ええそうよ！私の帝具【神ノ御手・パーファクター】は手先の精密動作性を数百倍に引き上げる。んもう最高にスタイリツシュな帝具なのよ！アナタ達がどんな大怪我しても死んでない限りはアタシが完璧に治療してあげる♡あつ…でも勘違いしないでね。彼女は自分から申し出て来たのよ？もうあなたの足を引っ張りたく無いんですって」

「アイツの意思ならそれでいいが…」

「ドクターは支援型の帝具だから護衛が必要だよな…」

ウェイブはスタイリツシュの身を案じる。

「うふふ、ありがと♡でもその優しさはプライベートにとっておいて♡」

そしてスタイリツシュは指を鳴らす。

すると周囲からぞろぞろと仮面をつけた不気味な集団が一斉に現れる。

「彼らは帝具で強化したアタシの私兵よ」

スタイリツシュが嬉々として帝具自慢をしているとクロメが小声で耳打ちしてくる。

「ねえ…お兄ちゃん、話長いし一緒に…行く?」

「そうだな…行くか」

俺達はスタイリッシュを無視して砦に突入する。

「あの…話してる最中にユウイちゃんとクロメさんが突入してしまいましたよ?」

「はやっ!」

「あの子たち…人の話を最後まで聞きなさいよ!」

あとで聞いた話だが、スタイリッシュは結構怒ってたらしい。

俺はクロメの戦いっぷりに感心していた。

今の10代ってあんなに動けんのか?

「こんな奴ら…能力を起動させるまでもない…全部片付いたら組み替えて遊んであげる

…お人形さんたち…」

「クロ…そりやダメだ」

俺はクロメを背後から抱き寄せる。

「えっ?お兄ちゃん?わ、私何かダメだった?」

クロメの発した言葉…『全部片付いたら組み替えて遊んであげる』これはおそらく人

殺しを楽しんでる奴のセリフだ。

「人殺しは楽しんじゃ終わりだ…戻れなくなるぞ？」

俺はクロメを軽く叱る。

「ご、ごめん…気をつける…」

「分かればいいんだよ」

俺はクロメの頭を軽く撫でる。

するとダンツと発砲音と共に1発の銃弾が飛来する。

狙いは俺の額。

そのまま銃弾は俺の頭に命中…

する事はなかった。

俺は右手を銃弾に向ける。

すると銃弾は掌に触れた瞬間、突如として灰となる。

「人が話してる時は静かにしろって習わなかったか？まあいいや」

原理は簡単。

俺は何度かの戦闘によって腕を幾度となく回復している。

俺の皮膚は治れば治るほど炎…と言うよりは熱に強くなるのだ。

そしてその応用で掌に熱を溜める。

すると掌の温度は約数千度。

それに触れた物質は燃える暇もなく灰になる。

「じゃあな」

俺は左手の爆破によって発砲した山賊の場所に一瞬で移動し、熱を帯熱させた右手で顔に触れる。

「っ!？」

山賊は声を上げる暇もなく灰になる。

「実戦で初めて使ったが…殺傷能力高すぎだな」

俺は新技の感触を確かめる。

同刻

「射殺せー!」

山賊達はボルスに向けて夥しい数の矢を射出する。

ゴウツ

ボルスは己れの火炎放射型の帝具【煉獄招致・ルビカンテ】で放出した炎を横に薙ぎ払う。

「…これもお仕事だから」

山賊達の断末魔が響き渡る。

「ぎゃあああああ!!!」

「あ、あぢいよおおお!!!なんなんだよこの炎!?!なんで水かぶつても消えねえんだよおおお!!」

「だ、だずげでえええ…」

ルビカントテから放出される炎は消して消える事はなく、対象が灰になるまで燃え続ける。

そこから少し離れた場所で燃え盛る同胞を見つめる山賊達。

「じ、冗談じゃない!こんな地獄さつきとおさらばしてやる!」

数名の山賊達は砦を逃げ出すが、行く手は蒼炎の壁に阻まれる。

「ちっ…どうすりゃ…」

1人がそう呟いた瞬間

バシユシユッ

と小さな音と共に山賊達の頭が貫かれる。

音の正体は小さな羽。

「あ…れ…?天…使…」

山賊の1人が宙に浮かぶランの姿を確認するとそう小さく呟き、力尽きた。

「ふう…ユウ…茶毘のおかげで取り逃さずに済みました」

ランは小さく安堵の息を漏らす。

翼の帝具【万里飛翔・マステイマ】

それがランの所有する帝具の名だ。

それから俺たちは各々の力で山賊達を瞬く間に殲滅していった。

砦から少し離れた丘の上。

タツミとエスデスはイエーガーズの殲滅戦を眺めている。

「すげえ…」

タツミが小さく呟く。

「タツミ…お前は私が育てる。これぐらいできる様になるぞ」

「なんだか…いやに優しいんですね」

タツミはエスデスの意外にも優しい物言いに困惑している。

「ん？聞いていたイメージと違うか？実は私もこんな気持ちは初めてなんだ。誰かを好きになるというのはな。だが…悪くない」

「……！」

タツミはあわよくばエスデスを革命軍側に引き込めるのでは？と考えていた。

殲滅戦の翌日

「よお、大分疲れてんな」

「昨日はよく休め…なかったみたいだな。その様子じゃ」

ウエイブと俺は疲れが目立つタツミの事を気遣う。

あらかた、一晩中オモチヤにでもされたのだろう。

「緊張して朝まで眠れやしなかった」

「どうやら朝まで抱き枕にされたらしい。」

「クロは午前中だつてのにお菓子か？」

「別にいいでしょ？」

「もう少し海産物を口にした方がいいぞ」

「そうしたらウエイブみたいに磯臭くなる」

クロメはしれつとウエイブをデイスる。

「何？」

クロメを凝視してたタツミを訝しむ様に声をかける。

「いや…失礼かもだけど、手配書のアカメって人に似てるなって思っ」

「あ、それ俺も思った」

タツミの疑問にウエイブも同意する。

「ああ…優等生の身内だよ。帝国を裏切っちゃったんだけどね。早くもう一度会いたいなあ…会って…私の手で殺してあげたいの。大好きなお姉ちゃんだも…痛っ！」

「姉妹は仲良くな」

俺はクロメの頭を小突きながら咎める。

「お兄ちゃん…」

うー、と可愛く唸るクロメの頭を撫でながらウエイブ達と談笑していると

「今日から数日狩りに行くぞ！フェクマだ！ユウイとクロメ、ウエイブも共をしろ」

「了解」

「夕方までは私、クロメ、ユウイで東側。ウエイブとタツミで西側を探索する。ユウイとクロメはそこが見えないからな。これを機に隊長としてその実力を測ろうと思ってる。

夜になったらウエイブとタツミには交代してもらおう。その時はタツミは私とだ」

「あー…ウエイブ、夜になったら帰っていいぞ」

「うん。別にいなくていい」

「っえ!」

エスデスの発言と俺とクロメのウェイブディスプレイに2人は声を上げた。

フェクマ：フェイクマウンテンと呼ばれる山には擬態を得意とする危険種が複数生息しており、戦闘における観察眼を鍛えることのできる山だ。

そんなフェクマに到着した俺、クロメそしてエスデスは大した苦戦もなく危険種を狩り続けている。

「…クロ、少しいいか?」

「え?どうしたのお兄ちゃん?」

「お前…体になんか違和感ないか?」

「?別に平気だけど」

「ならいいんだが…」

俺は少し気がかりなことがあった。

あとでドクターにでも相談してみるか。

五話 決戦前

フエイクマウンテンでの狩りを終えた俺たちは何故か拷問室に案内された。

「一体どうしたんですかね？」

「さあな。ウェイブがなんか連れてかれてたけど」

「わかんないけど、タツミを逃したからじゃないかな？」

「ああ……」

クロメの憶測を聞き俺とランは納得いったような声を漏らす。

ちなみにセリユーとスタイリツシユはなんとかタツミを見つけれないか追跡中である。

そんなことを話していると『拷問室』と書かれた部屋に到着する。

そして俺とクロメ、ランはその部屋の扉を開く。

そこにはいわゆる『石抱』と呼ばれる拷問を受けているウェイブの姿があった。

ちなみに石抱とは洗濯板のようなギザギザの木の板の上に正座させ、膝の上に重りとして石を置くという拷問だ。

「ん？ やつと来たか」

俺たちの入室に気づいたエスデスが声をかけてくる。

「何やってんだよ……」

「見ての通り罰を与えているが?」

エスデスは何でもないように言う。

相変わらずドSっぷりだ。

「……あの……なんていうか……本当に申し訳ありませんでした。このウェイブ、深く反省しております」

……ここでようやくウェイブが口を開いた。

「タツミを逃したのも注意散漫だが、それよりもナイトレイドを逃したというのが情けない……クロメ、石を追加しろ」

エスデスはウェイブの失態に呆れながらクロメに指示を出す。

「んっ」

ゴトツ

「あだだだだだだ!!」

クロメはウェイブの膝に石を追加で乗せる……結構な高さから。

「結構上から落としたな」

「ですね」

「インクルシオならば中身は百人斬りのブラートだろう。ナイトレイドの中でも要注意人物だが…だからといって逃げられていいということにはならん。これで賊はアジトを移動させてしまっただろう。ユウイ、奴の背中を傷が残らない程度で炙ってやれ」

俺かよ…やるけど。

「温度調整つて結構難いんだけどな…特別だぜ？」

「あざああああ!!」

俺はそういいながらウエイブの背中を炙る。

「ウエイブ…お前の技量は完成されているがメンタルが甘い。反省することだ…今回はあと水責めとムチ打ち程度のお遊戯で済ませてやる」

「それでお遊戯かよ…」

改めて俺がエスデスのドSっぷりに小さく呟く。

「だが…次に失態を犯したら私自らお前を…処罰する。肝に銘じておけ」

「……ハイ」

俺も一瞬エスデスの言葉…というよりは威圧感にゾツとする。

そんな時、拷問室の扉が勢いよく開く。

「隊長！申し訳ありません！フエイクマウンテンを山狩りしてもタツミは見つからず、コロでも追跡できませんでした！」

「ヘカントンケイルの本分は戦闘だろう、気にするな。スタイリツシユの方どうだったんだ？」

「はい。おそらく独自で調査してると思いますが、まだ連絡はありませんね」

「まあ…望みは薄いかな」

エスデスはセリユーの報告に残念そうに息を吐く。

「隊長…そのタツミ君の件なのですが…：先程のお話だと反乱軍に入る可能性が高いと思いますが、もしも敵として現れた場合私達はどのように対処すればよろしいでしょうか？」

ランがエスデスに確認する。

まあ好きって言ってたしな。

「正直…：タツミのことは今でも好きだ。なかなか手に入らないからこそ燃えるものもある…：だが、それよりも部下の命が最優先だ。生け捕りが望ましいが生死は問わん」

「本当だな？殺しても文句言うなよ」

「了解しました」

「反乱軍に入っていた場合は必ず捕らえます！」

俺たちはエスデスの言葉に了解の意を示す。

それよりもエスデスが俺たちの事をしっかり考えてくれていることに驚きだ。

意外と仲間思いなんだな。

数十後

俺はある相談のため、ドクターの研究室を訪れていた。

「あら、いらつしやい。待ってたわよ」

「悪いな。邪魔する」

俺はドクターに断りを入れ、入室する。

「それで？相談って何かしら？」

「クロのことでちよつとな」

俺が相談しに来たのはクロメのことだ。

いつも薬を摂取していることが気になり詳しくそうなドクターに相談に来たのだ。

「ああ、あの子ね。何が知りたいの？」

「あいつの体のことをちよつとな。あいつの使ってる薬…あれは体に影響を及ぼすものなのか？」

「うーん…それは調べてみないとわからないわ」

「調べられないのか？」

「あの子が大人しく調べさせてくれるとは思えないのよねえ」

確かにクロメはそういうのは嫌がりそうだな。

「そうだっ！これをあの子に飲ませてくれるかしら？」

ドクターはそう言つて一粒の錠剤を俺に差し出す。

「これは？」

「アタシの調合した強力な睡眠薬よ。即効性だし後遺症も残らない。あの子が寝たらこ

こまで連れてきてちょうだい」

「…変なことはしねえよな？」

「ええ。アタシ、女に興味ないもの」

なんか説得力ある。

「お兄ちゃんどしたの急に」

「菓子もらつたんだが俺甘いもん苦手だからよ。クロにやろうと思つてな」

そう言つて俺はクロメに一枚のクツキーを差し出す。

それにはドクターにもらつた錠剤を細かく砕いてまぶしてある。

この為にわざわざセリユーに菓子をせがみにいったんだ。
マジ恥ずかしかった。

「えっホント!? ありがとう! じゃあ早速いただきまーす」
ぱくっ

クロメがクッキーを咀嚼して数秒

「あ、れ? からだ、がき、きゆう、に…うぐ…: スウ…スウ」

クロメが眠りについたことを確認し、俺はドクターの研究室に向かう。

ドクターがクロメの体を検査し終え、部屋から出てくる。

クロメはもう自室のベッドに寝かせてある。

「はつきり言うわ。彼女、このペースで薬を使い続ければもう長くは持たないわよ」

「あいつ…: やっぱ隠してやがったか…: あいつの寿命は?」

「そうね…: このまま行くと持って3年ってところかしら」

「どうすればあいつの寿命を伸ばせる?」

俺は想定していた中でもっと悪い予感的中してしまい、その解決策を継る思いで尋ねる。

「もう薬を飲まないように、としか言えないわね。でも正直に言ってもあの子は絶対に納得しない。あなたにもわかってるでしょ?」

「まあな」

クロメは洗脳とも呼べるレベルで帝国を心酔している。

「強引にでも戦いを終わらせてあいつの負担を減らすしかないか」

「そんなあなたにアタシから提案があるわ」

「提案？」

俺はドクターの言葉に疑問を浮かべる。

「まだ誰にも言っていないのだけど、ナイトレイドのアジトに目星がついたの」

「…何が言いたい？」

「ナイトレイドのアジトに、アタシたちで乗り込まないかってことよ。アタシはその準備を終えてるけど、決定打にかけるって感じなのよね」

「別に構わねえ。それであいつの負担が減るんなら」

「決まりね。決行は今夜。こつちから連絡をよこすわ」

「わかった」

今夜俺とドクターはナイトレイドに殴り込みに行くことが決まった。

時間は既に22時を超え、ようやく俺の自室にドクターの改造人間が訪ねて来た。俺は素早く準備をし、ドクターの部屋に向かう。

「悪い。待たせたか？」

「いいえ。それじゃあ行きましようか」

俺とドクターを先頭に仮面集団がついてくる。

「なあドクター。アンタはなんで帝国軍にいるんだ？」

俺はふと頭に浮かんだ疑問をドクターに投げかけてみる。

「アタシは帝国の軍医だったのよ。死体もたくさん見てきたわ。そしていつも思っていたの、戦死した兵士たちを見てね」

「……………」

俺はドクターの黙ってを静かに聞く。

「彼らにもっと強い武器や防具があればってね。私の夢はスタイリッシュな帝具にも負けない兵器を作ること。もう誰にも死んで欲しくないのよ」

俺はドクターの言葉を噛み締める。

最初はただのマッドサイエンティストだと思っていたが、どうやら俺の勘違いだったらしい。

…色々考えてる。

「あつ、そうだわ。これをあなたに渡しておくわ。大事にしてね♡」

思い出したかのようにドクターが俺にあるものを差し出す。

それは3箇所は何やら噴射口のついた一対のガントレットだった。

「これは？」

「それはアタシがあなた用に作成した特製ガントレットよ。その3つの噴射口からは調合された特殊な風が噴出され、あなたの能力をアシストしてくれる。アタシの計算なら今までの力で最大火力の匹敵程の力を出せる筈…あなたなら理解出来るわよね？」

「すまねえな」

「いいのよ気にしないで」

俺が渡されたガントレットの説明を書き終えるとほど同時に背後から巨大な耳を携えた女、鼻が肥大化している仮面の男、目を大きく見開き瞬き一つしない大男が現われる。

見た感じドクターの改造人間っぽいけど…随分と個性的だな。

「スタイリッシュな様！そろそろ匂いが近づいてまいりました！」

「そうなのねハナ、ありがとう。ミミとメも頼むわよ」

「そのままなんだな」

耳でかい奴が『ミミ』で鼻でかいやつが『ハナ』、目がデカいのが『メ』って……

俺たちは道無き道を歩いて行く。

「匂いはこちらに続いています！」

「前方に糸の結界のようなものが、私と同じ動きをしながら避けてください」

「前方から微かに人の声がします」

「すげえな。しっかり役割こなしてる」

「初めての实戦投入だけ予想以上ね。フツあの子はどーも怪しいと思ってたの♡」

あの子とはおそらくタツミの事だろう。

そして到着した。崖に埋め込まれるように建てられた建造…ナイトレイドのアジト。

「本当にあつたな。アジト」

「ええ。フェイクマウンテンからは随分離れてたけどね」

さあ…決戦の時だ。

六話 スタイリツシユな進行

「…トローマ、引き続き任務を続行するとのことだ」

「すげえな」

「上出来ね。流石は桂馬ね」

先に敵地に飛び込んだ桂馬：「トローマが早速1人を抹殺したとの連絡を受ける。

「さあ…チームスタイリツシユ。熱く激しく攻撃開始よ！」

ドクターの号令と共に一斉に仮面集団がアジトに突撃する。

「…しかしいいのですか？ エスデス様に賊のことをお知らせしなくて」

メが不安そうに呟く。

「…ホントは報告するべきなんですし、隊長に言えば恐らく全員での奇襲になる

…それはあの子…クロメの負担が増えちゃからね」

「…すまねえな」

「いいわよ気にしなくても♡」

「ではセリユーに声をかけなかったのも？」

メに続いてハナが質問する。

「あの子は隊長に知らせて聞かなそうなものね」

「あいつはそう言う奴だからな」

「まあセリユーがいなくても飛車と角行がいれば盤面は何とかなるわ！それに茶毘、あなたもいるものね」

「まあクロの負担を減らすためだからな。頑張るよ」

俺の返答に満足そうに笑みを浮かべるドクター。

「カクサン。その帝具はメンテナンスすると言って取り寄せてるんだから傷つけちゃダメよ」

「ワツハハ!!俺の頭脳と体力で使いこなして見せますぜ!」

ドクターの注意に豪快に答える豪快な大男。

彼の手には俺とセリユーがナイトレイドより回収した帝具【万物両断・エクスタス】が握られている。

「トビー!!アンタは大物相手よ。いける?」

「最高のコンデイションです。誰にも負ける気がありません」

続いてカクサンとは対照的に冷静に返答する細身の男。

体がほとんど機械になっており、痛覚も存在しないらしい。

役割はカクサンがインクルシオ、トビーがアカメだ。

俺は好きに動いていいらしい。

俺はカクサン。

スタイリツシユ様に力と帝具を与えてもらった。

俺の相手は高い防御力を誇るインクルシオだ。

そしてそのターゲットは目の前で同胞：将棋でいう『歩』たちを薙ぎ払っている。

「まあ帝具使いには『歩』じゃあ敵わねえよなあ…そろそろ行くか」

「オラアアアアア!!!」

暴れ回るインクルシオに俺はゆっくりと接近する。

「やあ鎧の兄ちゃん。お前の相手は俺らしいぜ」

「……その帝具は……」

「ん？ああこれか？万物両断・エクスタスお前対策でスタイリツシユ様に与えられた俺

の帝具さ」

「それは…お前のじゃねえ!!!」

インクルシオは抜刀しながら突進してくる。

「何怒ってんだか……無んっ!」

俺は呆れながらインクルシオの一撃をその身で受ける。

おお！流石スタイリッシュ様！このカクサン！インクルシオの攻撃を受け切れませんでした！

そして俺はエクスタスを鋭く振るう。

「肉を切らせて…骨を断つ！」

「ぐおっ」

エクスタスの一撃がインクルシオに掠る。

掠った部位からは血が吹き出している。

「ほお…いい反応だな。腕を切り落としたら思ったのだが」

「クツソ…」

インクルシオが悔しそうに声を漏らす。

「せっかく堅い鎧を持つてるのに残念だったな。こっちはこの世の全てのものを切断できる帝具だ！防御力なんて関係無いんだよ！」

我が名はドビーという。

スタイリッシュ様によって強化された強化兵です。

体のほとんどが機械に置き換えられており、もはや痛覚すら存在しない。

そんな私の相手はナイトレイドでも悪名高いアカメだ。

そんな彼女は目の前で同胞たちを刻んでいる。

噂に違わず凄まじい。

「……『歩』では足止めにもなりませんか…『ガグ』『グル』緑髪の青年の相手をお願いします」

「ガッ」「グッ」

私は背後に控えるのはスタイリッシュ様に頂いた将棋であるところの「と」と呼ばれる大男が2人控えている。

2人は身体能力のかわりに言語能力を失ってしまったため、簡単な返答しか返せない。

「では…行きますよ」

私たちは標的と接敵する。

「敵ながら見事な腕前…」

「！また新手かよ！」

「……強いな」

私は右腕に内蔵された刃を露出させながらアカメに迫る。

「我が名はトビー。アカメ殿に一騎討ちを所望する」

しかし、私の攻撃は簡単躲され、すれ違いざまに斬りつけられる。

一斬必殺と名高い刀に。

ガキイイン

「!?」

「すみませんね。生憎全身機械なもので」

アカメが改めて私を見据える。

「どうやら強敵と認めてもらえたようだ。」

「アカメちゃん!」

「グッ」「グッ」

緑髪の青年がアカメの援護に回ろうと向かってくるが、それにガグとグルが立ちはだかる。

「こいつら…邪魔…!!」

「予想通り。村雨、インクルシオに対して優勢です」

「ミミの報告にドクターは笑みを浮かべる。」

「計算通りね! 相性の良い相手をぶつけければ封殺できるわ」

「このままいけば俺の出番ないかもな」

「そうなるかもしれないわね♡」

この時の俺たちは見誤っていた。

ナイトレイドの力を…

俺は負傷したインクルシオに追撃を加える。

「死に損ないが！」

「それを返せよ！シエーレのだ!!」

「ああ!?!誰だよ！」

俺は帝都で用心棒をしていた。

仕事の内容はクズと言える様な富豪の護衛などだ。

だが俺はそんなクズに騙され、汚名を着せられた。

3年前

俺は帝都警備隊員4名に取り押さえられている。

「ち、違う！俺はやってない！」

「何を言っている！証拠も上がっているんだ！言い逃れ出来るものか！」

俺の罪状は富豪殺しだ。

当然俺はやっていない。

捕らえられてからも俺は必死に弁明した。

「…いい加減認めたらどうだ？」

「俺は違うって言ってるだろうが!!!」

「はあ…あのな、お前に一ついいことを教えてやる」

「？」

「金持ちが黒と言ったらどんな白でも黒になるだよ…わかったか？」

俺はこの言葉に絶望し、監獄に入れられた。

刑は死刑だそうだ。

3年を監獄で過ごしていたある時

「あなたが○○であつてるかしら？」

「ああ？なんだオカマ野郎。なんで俺の名前を知ってる？」

突然面会だと連れてこられた部屋にいたのはオカマだった。

「あなた…減刑出来るって言ったらどうする？」

「!？」

減刑出来るならどうするだど？決まつてる。

「そりやあなんでもするさ」

「なら私の人体強化の実験台になってくれないかしら？報酬は減刑でどう？」

「ああ…やるさ。よろしく頼むぜオカマ！」

「オカマジじゃないわ。スタイリツシユよよろしくね♡」

そして俺はこの日から本来の名前を捨て、カンサンとして強靱な肉体と帝具を手にスタイリツシユ様に報いるために戦うと決めたのだ。

「俺はスタイリツシユ様にお前の首を差し出すつて約束したんだよ!!!」

俺はエクスタスの刃をインクルシオの首へ伸ばす。

「っ?!あぶねえ!」

「チツ、ちよこまかしやがって」

俺は力と防御力はあるが機動力に欠けるのだ。

相手の攻撃は効かないが、こちらの攻撃も中々当たらない。

だが確実にこちらが手傷を負わせているのだ。

このままいけば勝てる。

「何苦戦してんのよ!相変わらずだらしないわね!」

俺とインクルシオが同時に視線を移す。

そこに立っていたいたのはピンク色の髪を靡かせた小柄な少女。

だがその手には身の丈ほどのライフルを手にしている。

「マイン!!」

インクルシオが声を上げる。

マイン? 手配書では髪型はツインテールだった筈だがイメチェンか?

「はあ…『歩』は足止め出来なかつたのか…合流されちまつたじゃねえか」

「さっさと片付けるわよ。敵がエクスタスを持っているだけで腹が立つ!」

マインは俺の手にしているエクスタスを一瞥すると声を上げる。

「さっさと片付けるだ?!? おいおい今の状況分かってんのかよ?!? アジトが発見されて敵に総攻撃からってんだぞ?!? 分かってんのか?」

俺は少女に丁寧に現場を説明してやった。

「だからこそよ…」

それでも少女は余裕そうだった。

「余裕ぶってんじゃねえ!!」

俺は宙に飛び上がる。

マインはそんな俺に銃を向ける。

バカめ！改造された俺の体はインクルシオの攻撃すら防いだのだ。
今更銃なんか効くものか！

キイイイイン

向けられた銃口が甲高い音を立てる。

ドウツ！

そのまま極大なレーザービームが放たれる。

俺はその規模に目を見開く。

「な、なに!?防ぎ切れない！クソオオ！」

俺は体の半分を失い、地に落ちる。

「す、スタイリツシュ様。も、もうし、申し訳ございません…」

俺はそのまま息を引き取った。

「…カクサンがやられました。歩兵もごっそり数が減っています」

「あらやだ…誤算だったわ」

「俺もそろそろ…ん？」

ミミの報告を聞き、そろそろ出番かと思った時空に違和感を感じる。

その違和感はミミも感じ取った…というよりも聞き取ったが正しいだろうか？

「…空だ!! 何かが近づいてくる!」

「え? それはどういう…」

ドクターが何かを言いかけた瞬間俺たちの真上を何かが通過する。

「特級危険種のエアマンタ!」

ドクターがス驚きの声を漏らす。

「人が乗っています…アレは!?! 元將軍のナジエンダです!! 他にも2人ほど乗っています!」

「なーんてスタイリッシュ!! 特級危険種を飼い慣らして乗り物にするなんて!!」

メの報告に興奮するドクター。

「感心してる場合じゃねえだろ」

「そうだったわね。茶毘お願ひ出来る?」

「おう…ちよつと暴れてくるわ」

俺は崖から飛び降りた。

ガキイイイン!

甲高い音を立てながら私の刃と村雨が幾度となくぶつかる。

そして

「くっ！」

私は左腕を肩から切断される。

「一撃で葬れないなら、こうやって刻んでいくしかない…相当痛いぞ覚悟しろ!!」
相当の痛み?

「……フツ、痛み? そんな感覚…もう私には存在しませんよ」

必ずスタイリツシユ様に彼女の首を献上する!!

恩に報いる為!

私は半年前まで地方で暗殺稼業を営んでいた。

そしてある依頼で地方の領主を暗殺した際にヘマをしてしまい捕まってしまった。

当然刑は死刑だ。

そんなある日

「こんにちは。○○君であつてるわよね?」

「ええ私が○○ですが…どちら様で?」

私に面会に来たのは俗に言うオカマだった。

「名乗り遅れたわね。アタシはスタイリツシユよろしくね」

「……(ち)ら(こ)そ」

そんな私は彼？に提案された。

提案された内容は人体改造を受ける代わりに減刑というものだった。

私はその契約を受けた。

それから私は元の名前を捨て、トビーとして生きる。

私は切り落とされた左手から剣を生やす。

そしてそのままアカメを斬りつけるも間一髪で躲され、頬を浅く切り裂く程度に収まる。

アカメは切り上げの要領で刀を振るう。

私は右腕を切断されるも素早くこちらには銃口が生やす。

「お……おとおおとおおー」

私は雄叫びを上げながらアカメの胸に銃口を当てる。

殺った！

そして私は引き金を……

引くことはできなかつた。

私の胸を何やら槍のようなものが貫く。

「……おのれ……横槍とは無粋な……」

私が槍の飛んでき方向を見る。

そこには倒れ伏すガグとグルの姿とこちらを睨む緑髪の青年。

「なるほど…流石に2対1だと部が悪いですね。アカメ…最後に教えてください。私は何が貴女に劣っていたのですか？」

「…攻撃はとても激しかったが、最後の最後に周囲を見れていなかった」

「……なるほど。周囲をよく見るのですか…勉強になりました。スタイリッシュ様申し訳(い)ないません」

私は首をはねられた。

七話 帝具人間

「なんだアレ!? 新手か!？」

「ちよつと待って!」

ピンク髪の少女が何やらレンズをかける。

あつ…どうもトローマです。

「……! ボスよ! 援軍ね!」

「おお! いいタイミングだぜ! そしてズリィ!」

「…なんでよ」

鎧型帝具・インクルシオを装着した男が興奮し声を上げ、ピンク髪の少女が呆れている。

なんとも仲睦まじい光景だ。

そしてとてつもなくスキだらけ…

俺は音は立てずに少女に飛びかかる

可愛い可愛いお嬢さん。後ろがガラ空きなんだよおーっ!!

俺はそのまま少女の首を…

切り裂くことは無かった。

というかそれよりも俺が吹き飛ばされた。

「よくもやったな!!この野郎オオオオ!!」

「グホオツ!」

俺を吹き飛ばしたのは皮肉にも最初に俺が奇襲をかけ、始末したと思っていた女だ。

「ギ……ギギギギ苦しい……た、助けて……」

俺は命乞いするフリをしながら奇襲の機会を伺う。

俺は帝都でも名のある薬の売人だった。

当然捕まらないように色々手は尽くしていたが……帝国の搜索つてのは凄まじい。

俺は仲間に売られ、

俺は罪人として捕まった。

当然極刑だ。

これが約2年前の話だ。

そんな時だ。

あの人が訪ねて来たのは……

「あら、いい面構えね。○○、アタシと契約しない?」

「は？契約？なんの話だよ。俺もうどうでもいいんだ…放っておいてくれ」

「あら…思ったよりも無気力ね」

「つかなんで俺なんだよ？」

「…アナタにはアタシの力を授けるに値する価値があるとアタシが判断しただけよ。まあ本人が拒否するなら強制はしないわ」

じゃあねと退出しようとするオカマを俺は引き留めていた。

「待てよ！」

「…どうしたのかしら？」

「俺に…価値があるのか？本当に…まだ生きていいのか？」

「ええ。スタイリツシユよ。これからよろしくね♡」

こうして俺は自分の価値を確かめる為、スタイリツシユ様に名と力をいただいた。

だから俺は必ずお前らの首をあの方に差し出すんだ！！！！

「私はなあ…奇襲するのは好きだけどされるのはだいつつつ嫌いなんだよ！丈夫に強化されてるっばいが、その分楽に死ねると思うなよ…」

金髪の女は俺の首を絞めている力に一層力を込める。

「ぐふっ…けひっ」

俺はつま先に仕込んだ刃で女の顔面打ち込む。

刃は女の顔を貫通……しなかった。

なんと女は刃を口で受け止める。

「つ!?!?!」いつ……さつきもこうやって……防いだのか!?!」

俺はそのまま力いっぱい地面に叩きつけられる。

「ああ……スタイリッシュ様……バンザ……イ」

俺はそのまま意識を手放した。

「あ……」

目の前でトローマがやられた。

話の内容的にトローマが始末したと思っていたメンバーもなんとか生きているようだ。

ちよつと待てよ……じゃあ被害出たのこっちだけか? 何しに来たんだよ……

俺が現状に頭を悩ませていると複数の声が聞こえて来る。

「皆無事か!!」

現れたのはアカメと緑髪の青年。

アカメが現れたということはトビーもやられたのだろう。

マジで俺ら何しに来たの？

「おうー」

「これで全員集合ね」

ナイトレイドが仲間の安否を喜び合っているのも束の間。

ザザザザザザザザ

気味の悪い音を立てながら歩兵達が一斉に姿を表す。

「……まだこんなに残っていやがったか」

「けどコイツらで糸に反応してる敵は全部だぜ」

緑髪の青年がこのアジト周辺の結界を張っていたのか……見事に残りの戦力がバレてしまった。

あつ俺バレてねえわ

突如俺の体がフラついた。

「っ？ああ……アレを使ったのか」

俺は一瞬何事かと思ったが、数分前のドクターの言葉を思い出す。

『カクサン、トビー……そしてトローマがやられたら毒を分布するつもりなの。体に違和感が出たらそういうことだから、その時はこれを飲みなさい』

俺はその時にもらった試験管の中身の液体を体に流し込む。

「おっ、体が軽くなったな」

「どうやら効果が出たみたいだ。」

「そんであいつらは…おお、効いてる効いてる」

ナイトレイド達はインクルシオを残して全員膝をついていた。

「お、おい！どうしたんだよ皆!!」

インクルシオが叫ぶ。

「か、体が急に…動かなく…」

ピンク髪の少女が辛そうに答える。

ん？あのピンク髪…もしかしてマインか？手配ではツインテだったがイメチェンでもしたのか？

「この感じ…まさか催眠術か!？」

「いや…これは…」

インクルシオの予測をアカメは遮り、言葉を紡ごうとする。

可哀想だから手伝ってやった。

「毒だよ。とびきり強化な」

「[[[[[?!]]]]」

その場にいた全員が目を見開く。

インクルシオは見えねえけど…

「茶毘?!なんでこんなところに!?!」

インクルシオが声を上げる。

あれ?俺こいつに名乗ったことあったか?まあいいや

俺はインクルシオに答えてやる。

「なんでつて…賊のアジトがあるならそりや潰すだろ」

「そ、それなら何故全員で来てないんだ…?」

今度はアカメが質問して来る。

「…あいつの…クロの負担を減らしてやる為だ。仲間なんだから当然だろ?」

「な、何故クロメが出てくる!?!」

アカメが取り乱す。

「ドクターの見解だけだよ。あいつ、このまま戦い続けるとあと3年ぐらいしか持たねえんだよ」

どうやらアカメも心当たりがあるようで黙り込んでしまう。

「おつといけねえいけねえ。長話してると毒が切れちまう。さつさと…」

ドゴオオン!!!

俺の言葉を遮るように鳴り響く巨大な音と衝撃。

「あ？なんだ？」

俺は音がした方角を見る。

周囲には歩兵達の亡骸が転がっている。

そしてその中央に佇んでいるシルエットが1つ…手には歪な形の棍棒？の様な武器を持ったツノの生えた男。

すると上空から叫び声が響く。

「さあっ目の前の敵を駆逐しろ!!スサノオ!!」

「分かった」

ダンツ

「っ!？」

男は空からの指示に短く答えると凄まじい速度で俺との距離を縮めてくる。

そして勢いのまま振るわれた奴の得物は大地を簡単に砕く。

俺はなんとか爆風を利用し、距離を取る。

「おいおい…あんなん当たったら死ぬだろ」

俺はガントレットのスイッチを入れ、スサノオと呼ばれた男に掌を向けて炎を放つ。

おお…本当に火力がアップしてる…

俺が改めてドクターの発明品に感心している間、放たれた蒼炎は瞬く間に男を包み込

む。

だが男は何もなかったかの様に立っている。

…7000度以上の炎だぞ？普通死ぬだろ…

「つたく…お前人間か？」

俺は完全な劣勢に追い込まれていた。

「な……！新しく来た奴に茶毘が苦戦しています！」

「バカな！生物である以上毒が効かない訳がない!!」

メの報告にミミが激しく反発する。

「…分からないわ。未知の帝具かもしれないわね」

アタシはそう言っているスイッチを押す。

それは歩兵達に非常事態時ように内蔵していた爆弾の起動スイッチだ。

「…あんまりこれは使いたく無かったのだけどね…」

突然歩兵が爆発し出した。

「おっと…危ねえな」

俺は爆弾を避けながらツノ男を片付ける策を練る。

あらかた爆発が終わってもスサノオはほぼ無傷だった。

「はあ…やつぱこれしかねえよな…」

俺ら奥の手…日に数回しか使えない技の使用に踏み切る。

【しょうしつしょうか焼失焦火】…これならあいつを一瞬で灰に変えられる筈…

俺は右手の掌に熱を込める。

「ふんっ」

男は俺が一瞬掌に視線を移したことを隙と捉えたのか、攻撃を仕掛けてくる。

棍棒の大振りだ。当たればひとたまりも無いだろう。…当たればな

俺は大きく右手を振るう。

そして掌に相手の武器が触れた瞬間

シューッ

という小さな音を立てて消失する。

「っ？」

「なに不思議そうな顔してんだよ」

そのまま俺は掌をスサノオの顔面に叩きつける。

するとスサノオの体は4割ほど焼失した。

「……マジで人間じゃねえのかよ……」

普通の人間なら今ので確実に死んでいた。

だが今回の相手は普通では無かったらしい。

俺が焼失させた部分は数秒で再生していた。

「跡形もなく燃やせば流石に死ぬか？」

俺はガントレットによって爆発的に強化された炎を容赦なく叩きつける。

「……」

「だんまりかよ。別にいいけど……よっ」

俺は爆風で距離を縮め、ほぼゼロ距離で炎を放つ。

「……これもダメか」

しかし効果は無い。

俺たちが睨み合いを続けていると、再び上空から指示が放たれる。

「スサノオ！南西の森に敵が潜んでいる！逃さず潰せ！」

「分かった」

スサノオは返事を返し、南西の森……ドクター達の元に駆け出していった。

「つ……させるかよ」

俺も爆風を利用しスサノオの後を追う。

追いついた時、スサノオはドクターに武器を振るおうとしていた。

俺はそれを阻止しようとドクターとスサノオの間に炎壁を発生させる。

「そう簡単にドクターをやらせるかよ。うちの頭脳だぞ？」

俺はドクターを背に庇うようにスサノオと対峙する。

「茶毘！ 奴はおそらく生物型の帝具…帝具人間よ！ 核を潰さない限り決して死なないわ
！」

「なるほどな。通りで死なない訳だ」

俺は納得しながらスサノオを見据える。

核って言ってもな…どこにあんだよ

俺とスサノオは再び睨み合った。